

日本草創期における広域測量と地図

吉 田 薫

1. はじめに

本稿は「青銅器埋納位置の解説」(2015年度～2023年度)を受け、日本草創期における地理把握のための広域測量と地図について検討するものである。

残存する日本最古の全国地図は、奈良時代の僧・行基が作成したといわれる「行基式日本地図」(行基図)であり、平安時代の延暦24(805)年改定輿地図とされる。行基図は、その見目より「だんご図」の異称をもつ。メモ図の様相だが、諸国の並びと日本全体の大まかな形は正しい。

2. 青銅器埋納位置と測量(過年度報告)

志谷奥、荒神谷、加茂岩倉の各青銅器埋納遺跡と、当地のランドマークである大山・三瓶山・大黒山・高瀬山とで複数の二等辺三角形が構成される。このことは、青銅器が埋納された西暦1世紀の古代出雲国においては、位置を特定する三角測量の技術があったことを示していると考ええる。

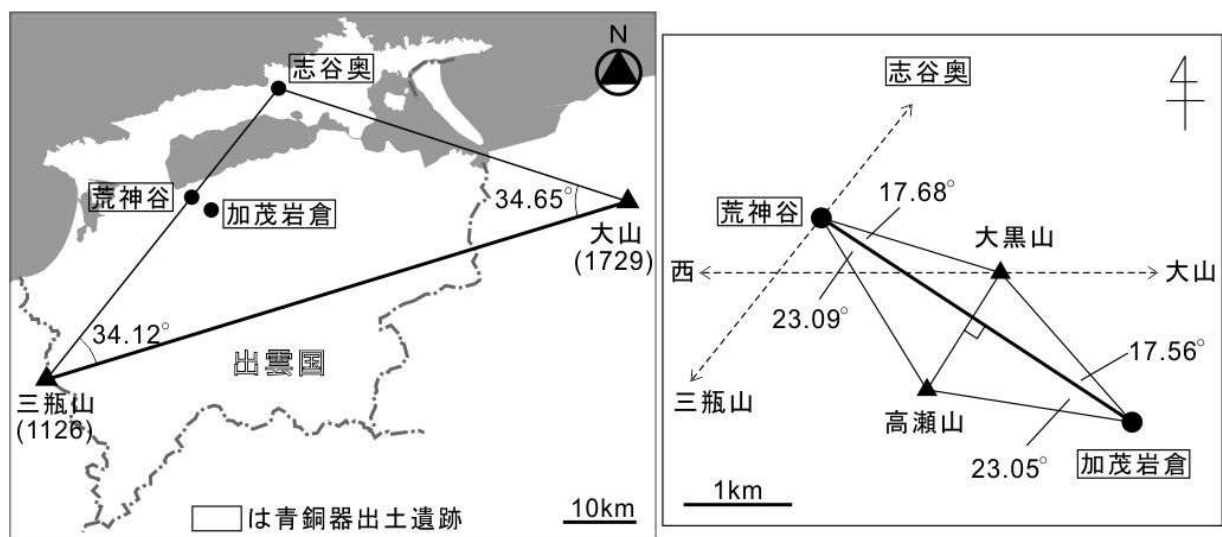


図-1 出雲国における青銅器埋納位置と山々の位置関係

3. 既往文献・資料

日本の草創期である弥生時代～古墳時代における広域の地理把握に関する文献・資料を整理する。

※(数値)は論述年。

(1) 土木分野

明治以前土木史は、古代日本の測量の歴史について次のように記述する(1936)¹⁾。
・原始的な測量が存在し、体の一部を利用して尺度とした長さにより、両手を広げた長さ、拇指・中指を広げた長さ、関節間の長さ、拇指の幅、上腕を広げた長さ、股を広げた長さなどを測定単位とした。

ただし、日本全土を対象としたような広域の測量については言及していない。

木村俊晃は、古墳の位置や形状について解釈を行った（1982-1984）。

- ・“応神・仁徳陵”などの古墳は巨大な土木施設である。その築造を可能とした高度の土木技術、とくに測量技術があった²⁾。

- ・志賀島の漢委奴国王の金印（金印授受は AD57 年）出土地は、2 神社と約 3km の二つの二等辺三角形を形成している³⁾。

須股孝信も、古墳の位置や形状について解釈を行った（1990）⁴⁾。

- ・古代（4、5 世紀）の前方後円墳は、その形状からみて幾何学と高度な施工技術によって築造された土木構造物であり、その技術と同レベルの測量技術も古墳時代に存在したと考えられる。

- ・古代の著名遺跡や古墳を結ぶ線分には、東西、南北、30° 方位、60° 方位を指す事例が多い。これは、直角三角形の相似特性を利用した測量行為の結果である。

(2) 土木分野以外

考古学者や在野の研究者が古墳・神社等の配置の意図性について、古代の信仰、神話・伝承等を絡めて論述している。それぞれ独自で多様な内容なので、本稿が必要とする部分のみを抜粋する。（図-3 参照）

日本古代史を専門とする学者の**岸俊男**は、次のように論述した（1970）⁵⁾。

- ・“柳本・馬見・古市・百舌鳥”の 4 大古墳群が、ほぼ東西同一線上にあり、そこには東西古道が走っている。

写真家の**小川光三**は、写真撮影の途上で東西方向に延びる「太陽の道」に気づいた（1973）⁶⁾。

- ・三輪山麓の檜原神社や箸墓を中心に、東の伊勢から西の淡路に至る東西の一線上に古い神社や山や峠が位置している。これは太陽祭祀に基づく「太陽の道」である。

愛知県の郷土史家の**大谷幸市**は、神社や山岳を結ぶと巨大な二等辺三角形が形成されることを示した（1982）⁷⁾。

- a. 諏訪大社（頂点）－香取神宮－伊勢神宮

- b. 伊吹山（頂点）－伊勢神宮（内宮）－三輪山

- c. 出雲大社（頂点）－三輪山－背振山

堀田総八郎は、ヨット航行の経験をもとに、古代祭祀と古代測量術について次のように記述した（1995）⁸⁾。

- ・今津湾（福岡市）周辺の六つの神社を二つ一組にして対角線で結ぶと、三本の線がほぼ“雲瀬”（筆者注：暗礁）上で交わる。

- ・漁師は地上の目標物を同一線上に重ねて方向を知り、二つ以上の線が交わる「山当て」の方法で漁場を知る。

- ・地上の目標物がない大海原では、太陽の日出や日入の方角、日中の影の長さや方位、夜になると北極星や南十字星などによって進む方角を知った。

- ・古代人は図解測量法の交会測量法を知っていた。

伊弉諾神宮境内の「**伊弉諾神宮を中心とした太陽の運行図**」（2000 年設置の石板）の表示内容は次のとおりである⁹⁾。

- ・海神神社（対馬）－伊弉諾神宮－藤原京－伊勢神宮（内宮）は同緯度である。

・出石神社－伊弉諾神宮－諭鶴羽神社（諭鶴羽山山頂¹⁰⁾）は、南北の軸線上に位置する。

・諏訪大社－伊弉諾神宮－高千穂神社・天岩戸神社は、夏至日出・冬至日入の軸線上にある。

・“出雲大社・日御碕神社”－伊弉諾神宮－那智大滝・熊野那智大社は、夏至日入・冬至日出の軸線上にある。

建築家の池田潤は、出雲と伊勢は最大の聖地であること、日出・日入位置と山岳・神社位置及び神話・伝承の間に関係があることを著した（2011）¹¹⁾。

・伊勢を中心にとすると、夏至日出・冬至日入方向に天孫降臨神話に関係する場所が連なる。笠沙岬（野間岬）－日向－足摺岬－室戸岬－朝熊ヶ岳（伊勢）－富士山－日立（常陸）。笠沙岬：ニニギノミコトとコノハナサクヤヒメが出会った場所。日向：ニニギノミコトが降臨した場所。足摺岬：古くは嵯陀岬との呼称もあり、ニニギノミコトを案内したサルタヒコとの関連がある。朝熊ヶ岳：アマテラスオオミカミが祀られる伊勢に位置し、夏至には富士山頂上より日が昇る。富士山：常世信仰を有する霊峰であり、コノハナサクヤヒメが祀られる。

・出雲－富士山の軸線上には諸国の一宮が所在する。出雲大社（出雲国）－熊野大社（出雲国）－粟鹿神社（但馬国）－南宮大社（美濃国）－真清田神社（尾張国）－浅間神社奥宮（駿河国一宮の奥宮）－寒川神社（相模国）－玉前神社（上総国）。

・北緯 35 度 21 分は、出雲－富士山を結ぶ特別な東西線である。須賀神社や氷ノ山はスサノオノミコトの大蛇退治に関わる。仏経山－須賀神社－大山－氷ノ山（須賀ノ山）－不破の関－尾張富士－七面山－富士山－日立（常陸）。

(3) 位置関係の確認（図-3 参照）

既往文献・資料が示す山岳・神社等の位置及び関係性を図-3 に示した。ただし、古墳群の位置等、短距離の関係性は省略している。方角を示す線は、伊勢神宮齋宮跡を起点とするケース（太陽の道）、伊弉諾神宮を中心とするケース、富士山を中心とするケース（伊勢を含む）に分けることができる。

1) 伊勢神宮齋宮跡を起点とするケース（太陽の道）

齋宮跡～伊勢ノ森（淡路島）を結ぶ東西線である。

2) 伊弉諾神宮を中心とするケース

東西方向：伊勢神宮－伊弉諾神宮－海神神社（対馬）を結ぶ。

南北方向：出石神社－伊弉諾神宮－諭鶴羽神社を挙げるが、ややズレがある。

日出・日入方向：夏至日出・冬至日入ラインは、諏訪大社上社本宮－伊弉諾神宮－天岩戸（神社）・高千穂神社を結ぶ。夏至日入・冬至日出ラインは、出雲大社・日御碕神社－伊弉諾神宮を結ぶが、那智大社はやや外れる。

3) 富士山を中心とするケース

東西方向の山岳：東西方向に位置する山岳のうち、広範囲のランドマークとなり得る 1000m 以上の高峰は次のとおりである。

a. 富士山（3776m）：日本一の高さの円錐形の美しい独立峰であり、日本を代表するランドマークである。（写真-1）

b. 七面山（1989m）：南アルプスの南東に位置し、法華経の聖地である。山頂から

富士山の美しい姿が眺められることで知られる。視点場ととらえるべきであろう。

c. 氷ノ山 (1510m) : 稲羽誌によれば、アマテラスオオミカミが旭日に映える樹氷を見てヒエの山と呼んだことが名前の由来であるとされる。なだらかな稜線を持つ連山の最高点である (Wikipedia による)。

d. 大山 (1729m) : 富士山と同様、長いすそ野をもつ独立峰であり、「伯耆富士」、「出雲富士」の呼称がある。数 10km 遠方より視認できる顕著なランドマークである。(写真-1)

つまり、富士山及び大山が抜きんでたランドマークとなっている。

東西方向の神社 : 出雲国、伯耆国、因幡国、但馬国、(丹波国 : 一部なので除外、) 近江国、美濃国、尾張国、信濃国、駿河国、(甲斐国 : 一部なので除外、) 相模国、上総国の 11 カ国があり、うちブロック体の 7 カ国・8 社の一宮がこの東西線上に位置する。神社位置については、意図された場合も、そうでない場合もあったと解釈すべきであろう。

夏至日出・冬至日入方向 : 笠沙岬 (野間岬) - 日向一足摺岬 - 室戸岬 - 朝熊ヶ岳 (伊勢) - 富士山 - 日立 (常陸) が位置する。

(4) 二等辺三角形

図-3 に、a. 諏訪大社 (頂点) - 香取神宮 - 伊勢神宮、b. 伊吹山 (頂点) - 伊勢神宮 (内宮) - 三輪山、c. 出雲大社 (頂点) - 三輪山 - 背振山、の各二等辺三角形を示した。香取神宮、諏訪大社、伊勢神宮及び出雲大社・三輪山は、国譲り神話に関係する。しかし、伊吹山や背振山はこの神話との関連が薄い。したがって、これらの二等辺三角形の意図性は必ずしも明確でない。

香取神宮の祭神 : フツヌシノミコト、諏訪大社の祭神 : タケミナカタノミコト、伊勢神宮の祭神 : アマテラスオオミカミ、出雲大社の祭神 : オオクニヌシノミコト、三輪山の祭神 : オオモノヌシノミコト (オオクニヌシの幸魂・奇魂)。

(5) 既往文献・資料のまとめ

既往文献・資料について、内容をまとめると次のとおりである。

- ・古墳時代には、かなり高度な測量技術があった。
- ・古代 (弥生時代～古墳時代) には、神社位置設定等が可能な測量が存在した。
- ・山岳と神社を結ぶと一辺数 100km の二等辺三角形が出現するケースがある。(意図性は不明確。)
- ・伊弉諾神宮を中心とした東西・南北ライン、日出・日入ラインが意識されていた。
- ・伊勢を中心とした日出・日入ラインが意識されていた。
- ・富士山を中心とした東西ライン、日出・日入ラインが意識されていた。
- ・富士山を中心とした東西ラインには、諸国の一宮が位置する。
- ・“山岳・遺跡・神社等” の位置関係は、神話や伝承により読み解ける。

これらの位置関係を掌握するためには広範囲の地理を知り、相応の測量技術と地図があったことを示唆している。測量方法等については、後述する。

4. 記紀における地理についての記述

ここで、『古事記』及び『日本書紀』における、広範囲の地理・地形の把握に関す

る記述のいくつかを示す。

(1) 国生み神話

オノコロ島に降り立ったイザナギノミコトとイザナミノミコトが行った国生みの順序は、次のとおりである。

古事記：淡路島→伊予島→隠岐島→筑紫島→壱岐嶋→対馬洲→佐渡島→秋津洲

日本書紀一：秋津洲→淡路洲→伊予洲→筑紫洲→隠岐洲→佐渡洲→越洲→吉備子洲

両書とも、淡路島の次は伊予（四国）となっている。国生みの場所を淡路島周辺とすれば、近い順と理解することができる。古事記は次に、直線距離を思わせる伊予（四国）→隠岐→筑紫（九州）の順だが、書紀は、伊予（四国）→筑紫（九州）→隠岐→佐渡という航路を想像させる順とする。違いの理由は不明だが、ランダムではなく近い順という共通性があり、“地図”の存在を窺わせる。

(2) 神武東征

ニギノミコトが降臨した日向国（九州南部）で生まれた後の神武天皇は、塩土の翁に、「東方に良い土地があり、天下を治めるによい」と聞き、そこで都をつくる決心をして東征に出発する。

これが何らかの史実を語るものだとするれば、決心にあたっては、東方の場所とはどのような所で、現在地よりどの程度離れ、経路上にはどのような場所があり、どのような障壁があるのかを事前に把握していたと考えるのが道理である。当然、その場には何らかの“地図”があったはずである。

(3) 崇神期及び垂仁期の神社整備

前掲の神社について、表-1 にまとめた。

崇神天皇のときに宮中で祭られていた天照大神を移し、垂仁天皇の時代に伊勢に鎮まった。

伊弉諾神宮の太陽運行図には、伊勢神宮－伊弉諾神宮が同緯度、伊弉諾神宮－天岩戸神社・高千穂神社が日出・日入関係で示されているが、高千穂の両神社と伊勢神宮の創建はいずれも垂仁期である。つまり、同一の意思の下で、セットで整備されたと思われる。

加えて、多くの神社の創建時期もこの頃である。

また、崇神天皇は各地の平定のために四道将軍を派遣した。いずれも四道将軍のオオヒコノミコトと息子のタケスナカハワケノミコトは会津で出会ったとされるので、この辺りまでの地理は把握していたと考えられる。

表-1 諸国の神社の創建時期

神社名		祭神	創建
伊勢国一宮	伊勢神宮	天照大神	垂仁期
信濃国一宮	諏訪大社	建御名方命	不詳
淡路国一宮	伊弉諾神宮	伊弉諾尊	不詳
但馬国一宮	出石神社	天日槍命	垂仁期
出雲国一宮	出雲大社	大国主命	不詳
対馬国一宮	海神神社	豊玉姫命	不詳
高千穂	天岩戸神社	天照大神	垂仁期
	高千穂神社	日向三代	垂仁期
熊野三山	那智大社	(滝)大己貴命	神武期
上総国一宮	玉前神社	玉依姫命	不詳
相模国一宮	寒川神社	寒川比古命・寒川比女命	不詳
駿河国一宮	浅間神社	木花咲耶姫	垂仁期
尾張国一宮	真清田大社	天火明命	神武期
美濃国一宮	南宮大社	金山彦命	崇神期
但馬一宮	粟鹿神社	天美佐利命他2	垂仁期
出雲一宮	熊野大社	素戔鳴尊	不詳
その他	鹿島神宮	武甕槌命	神武期
	香取神宮	経津主命	神武期
	須我神社	素戔鳴尊、稲田姫、他1	不詳
	霧島東神社	伊邪那岐命、伊邪那美命	崇神期

(4) まとめ

以上をまとめると、人代とされる神武期以降はもとより、神代の頃より広範囲の地理が把握されていたと考えてよいだろう。日本神話は稲作や鏡などの記述より弥生時代を写しているとされる。そして、古墳時代初期の崇神期・垂仁期（3世紀末～4世紀半）には、南九州～佐渡・会津辺りまでの地理の把握がされ、道標となるような神社も各地に創建されたと解釈することができる。

5. 測量の方法と地図の編集

(1) 既往文献・資料が示す位置関係

既往文献・資料が示す位置関係は、次のように整理できる。

- a. 3点（以上）が直線で結べる。
- b. 3点が 30° 、 60° 、 90° （直角）で結べる。

日出・日入方向は、任意の位置での把握が難しいので、東西方向より 30° の角度と考える。

- c. 3点を結ぶと直角三角形や二等辺三角形となる。
- d. 各地点の相互の位置関係は、信仰（太陽の道等）、神話・伝承、日出・日入等で説明できる。

(2) 測量方法

古代でも入手可能な道具で比較的容易にできる測量方法（可能性）を検討する。

a. 東西南北

太陽の運行を基にしたインデアン法で東西を求め、その直角方向で南北を知る。

b. 直角、 60° 、 30° の設定

紐を用意する。直角は辺比 3:4:5 で作る。 60° は 3 辺を同長にして作る。 30° は 60° を半分にする。

c. 三角測量

遠方の地点の把握には、距離の測定が不要な、平板を用いた三角測量が行われたと考えられる。三角測量の存在は、古代出雲国において紀元 1 世紀頃に埋められたとされる青銅器の埋納場所が、大山、三瓶山等とで複数の二等辺三角形を形成することでも裏付けられる。

次のような方法で行う（図-2）。

山頂 A の上に立ち平板上で山頂 B を視準する。図の縮尺を決め、平板上に a-b を描く。次に山頂 C への視準線を描く。次に山頂 B に移り、平板上の b を基点に山頂 A を視準して a-b 線の方角を合せ、山頂 C への視準線を描く。両線の交点が山頂 C の位置(c)である。次に山頂 C に移り、山頂 A と山頂 B を見通し必要な修正を行えば、誤差を縮小できる。このような作業を多数の山々を対象に重ねていけば、三角網図が出来上がる。

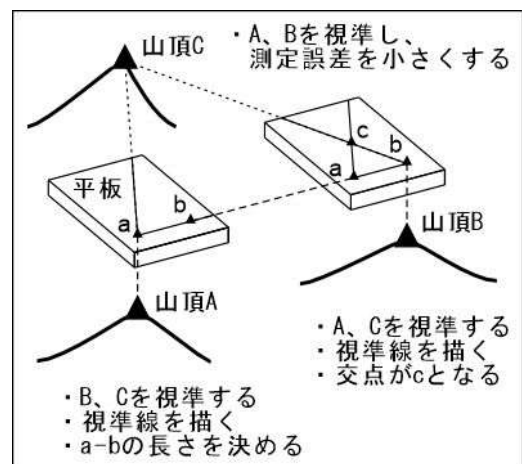


図-2 平板を用いた三角測量のイメージ

このときの図の縮尺は、見通し距離 50km を、作業の利便性を考慮して平板上で 50cm に表現するとすれば、1/10 万である。

(3) 地図の編集と複製

地域ごとの図を、平坦な地面等に写してつなぎ合わせれば、ランドマークの山々をつないだ三角網が出来上がる。九州南部から佐渡島・会津辺りまでをつなぐと 10m 長の地図となる。次に、持ち運び等の利便性に配慮して、1/10 万の図より 1/100 万の図を作成すると 1m 長程度の大きさとなる。

6. 国土の骨格

図-3 に、南九州～佐渡島・会津までを範囲として、前出の山岳、神社等とともに、それらを結ぶ東西線、日出・日入線等を記入してみると、富士山－大山－高千穂峰が概ね 30°-120°-30° の巨大な二等辺三角形を形成することが分かる。

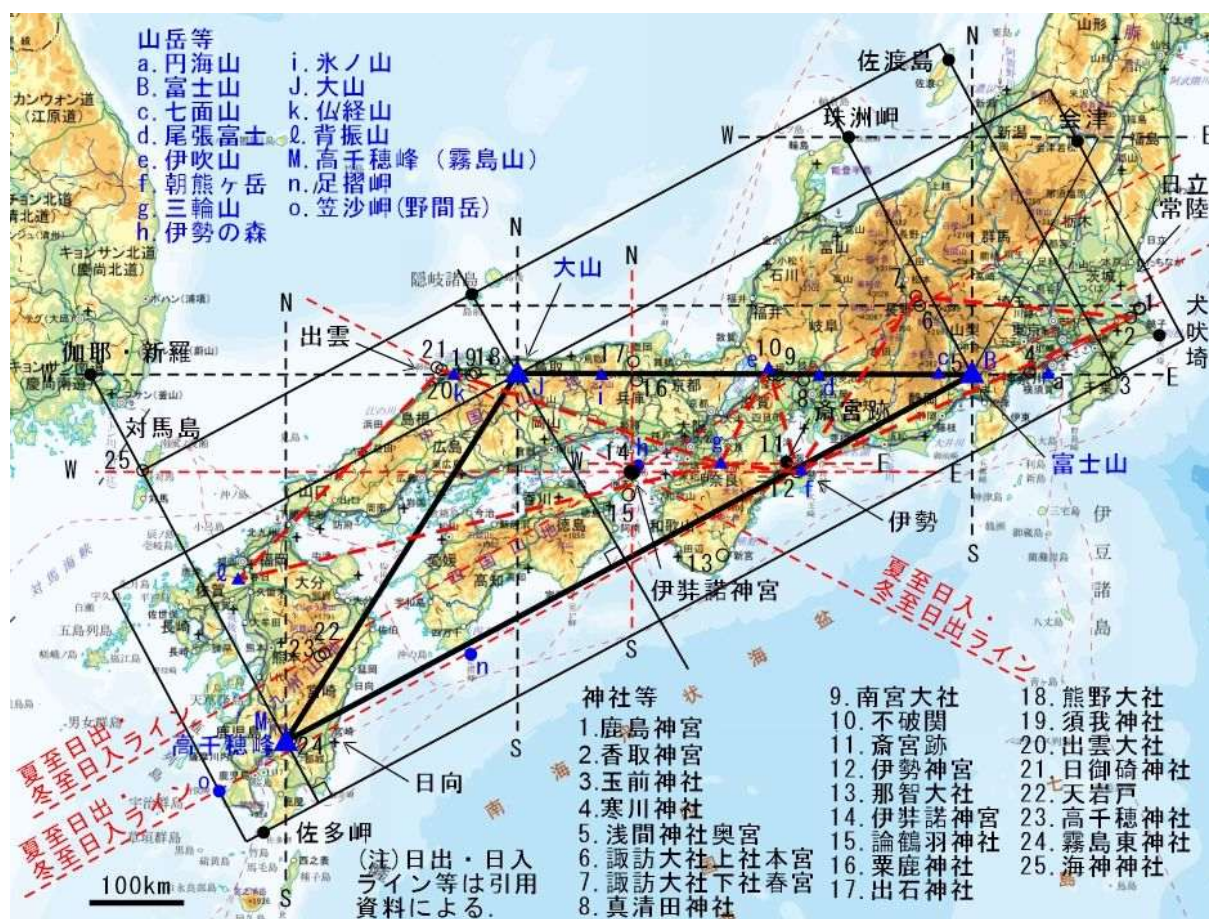


図-3 既往文献・資料で示される関係線と国土の骨格



富士山

大山

高千穂峰

写真-1 富士山、大山、高千穂峰 (高千穂峰の写真は、みやざき観光ナビ HP より引用)

表-2 各地点の座標値

位 置	標高 (m)	緯 度			経 度			緯度差			座標根拠	備 考
		度	分	秒	度	分	秒	度	分	秒		
富士山(剣ヶ峰)	3776	35	21	39	138	43	39	-	-	-	地理院山岳一覽	木花咲耶姫
大山(剣ヶ峰)	1729	35	22	16	133	32	46	0	0	37	地理院山岳一覽	大国主命
高千穂峰(霧島山)	1574	31	53	11	130	55	8				地理院山岳一覽	邇邇芸命降臨

表-3 二点の位置関係

位置関係	距離(km)	方位角(°)
1) 富士山-大山	470.83	271.638822
2) 富士山-高千穂峰	820.29	244.198742
3) 大山-富士山	470.83	88.638483
4) 大山-高千穂峰	456.91	212.975322
5) 高千穂峰-富士山	820.29	59.868181
6) 高千穂峰-大山	456.91	31.519489

表-4 三点の位置関係

関係線	計算式	角度	備考
∠大山-富士山-高千穂峰	1)-2)	27.4	同角
∠大山-高千穂峰-富士山	5)-6)	28.3	
∠富士山-大山-高千穂峰	4)-3)	124.3	計 180.0°

天孫降臨神話が伝わる高千穂峰は、遠方からも目立つ山である。そして、三山は神話でつながる。富士山にはコノハナサクヤヒメ、大山にはオオクニヌシノミコト、高千穂峰はニニギノミコトが祀られている。アマテラス側がオオクニヌシ側と交渉して国議りを成立させた後、天孫・ニニギノミコトが日向の高千穂峰に降臨する。ニニギノミコトは笠沙岬でコノハナサクヤヒメと出会い妻とする。

ニニギノミコトは、国土の重要な3基点のうちの一つの高千穂峰に降臨したのである。やがて、垂仁期になり、富士山にもニニギノミコトの妻であるコノハナサクヤヒメが祀られる。国土の掌握が進んだと考えられる。

そして、これら三山を結ぶ大二等辺三角形を中心にして、平行線、直交線、30°線、60°線を描けば、新羅～南九州～佐渡・会津～関東をまとめよく包括することができる。

7. 地図の形態

地図を使用するに際しては、複製を作る必要がある。可視領域である40～50kmの状況は現地では把握できるので、それ以遠、つまり不可視領域の位置関係を示すことがその地図の役割である。

紙が普及していないとすれば、地図を描く材料としては、布、革、板等が考えられる。また、「枝式地図」がある。日本水路協会のホームページに「枝式海図」が載り、次のような解説がある。

「ミクロネシアのマーシャル諸島では椰子の葉の枝柄に穴のあいた小石や貝殻をくくりつけた「スティックチャート」と呼ばれる海図が19世紀から20世紀初頭まで使用されており、小石や貝殻は島や環礁を意味し、椰子の枝柄は地図の骨組みであるとともに、海流やうねりの方向を示している。」

(<https://www.jha.or.jp/jp/jha/charts/history/h02.html>)

ある地点の相対的な位置を示すためには方角と距離が必要であり、「枝式海図」はこの要件を満たしている。簡素だが実用的であり、原初の地図の形態を想わせる。

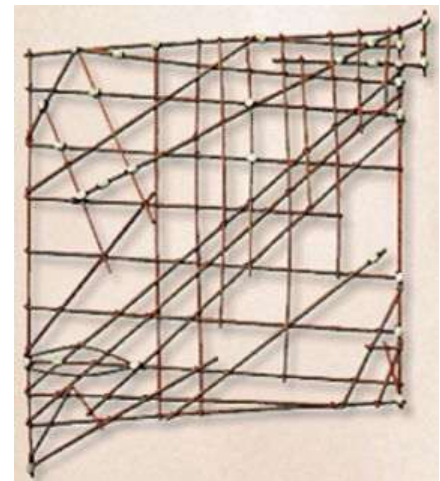


図-4 枝式海図の例

8. 古代の日本全域を表す枝式地図

図-5 は国土の沿革を枝図で表すとともに、日本列島の島々の位置を記入したものである。この図の概要は、次のとおりである。

- 富士山－大山が東西軸をなす。
- 富士山－大山－高千穂峰は、 30° - 120° - 30° の巨大な二等辺三角形をなす。
- \triangle 富士山－大山－高千穂峰をコアとして、平行線及び直交線を描くと国土全域が包含できる。
- 上記の平行線及び直交線に補助線（間隔：80km～100km 程度）を入れると格子が形成され、各地点が明示できる。
- 実際の格子は等間隔ではないが、枝図の作成に当たっては、等間隔の格子としても大きな問題はない。
- この格子に、主要なポイントや経路を入れれば、地図として用をなす。
- 使用の利便性を考えると、この枝式地図は長さ 1m 程度、縮尺 1/100 万程度であったと推察する。
- 格子の素材は、まっ直ぐな竹等が考えられる。

「枝式地図」の歴史年代は、出雲国で青銅器が埋納された時期には三角測量を行った形跡が認められるので、遅くとも紀元 1 世紀まで遡ることができよう。そして、徐々に詳細となり、崇神期・垂仁期までには図-5 に示す程度にはなったと思われる。

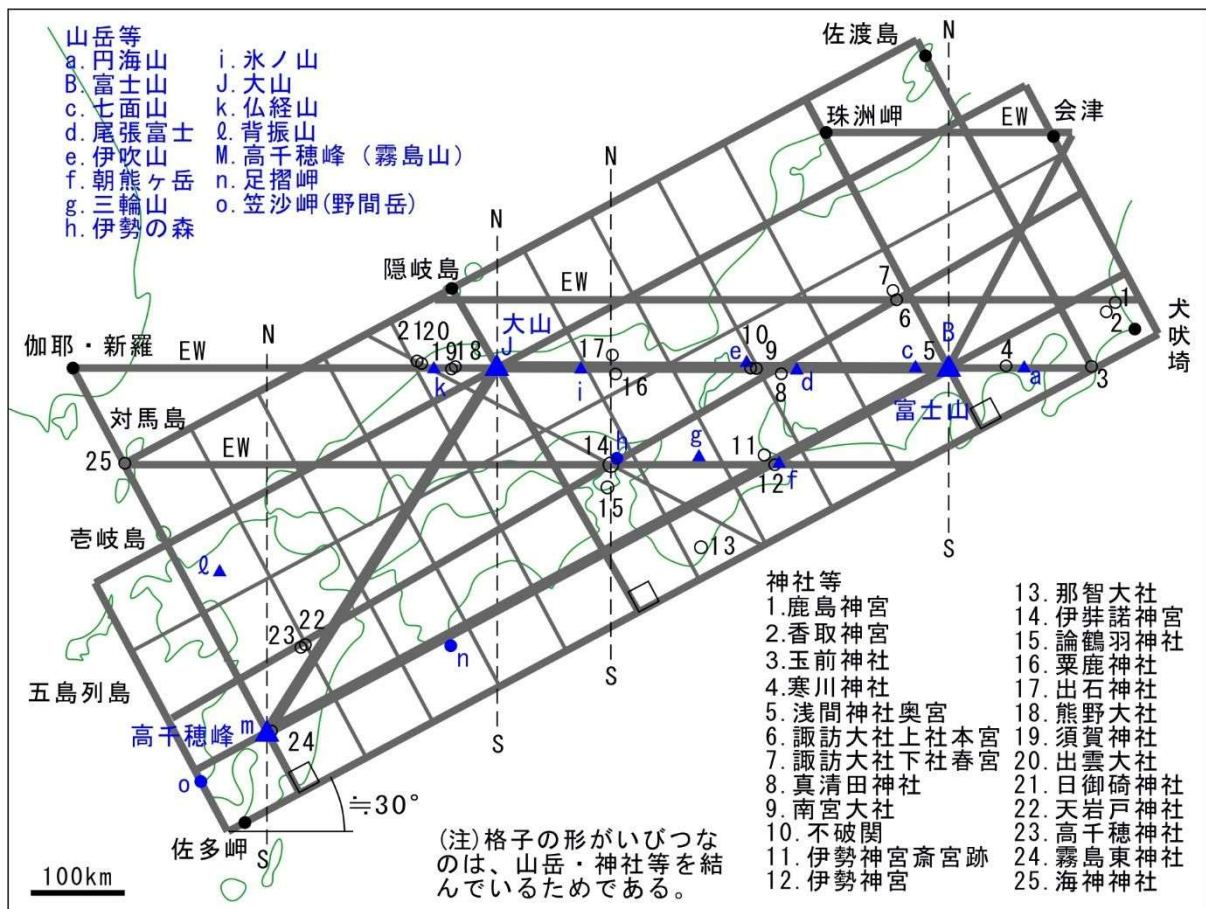


図-5 古代の日本全域を対象とした枝式地図

9. まとめ

日本各地の著名な神社や山岳等は、基点の東西方向や日出・日入方向に位置するものが多数あり、しばしば神話・伝承に関係している。神社の配置や神話・伝承は人為が介在するものであり、相応の測量技術と地図の存在をうかがわせる。

つまり、日本の草創期である弥生時代及び古墳時代には、国土全体を示すような広域の地図が存在し、それを作成するための測量技術があったと考えられる。

地図作成のための測量技術は、 30° 、 60° 、 90° 、直線の形成と三角測量等である。三角測量の存在は、旧出雲国の3カ所の青銅器埋納位置が大山、三瓶等の山々と複数の二等辺三角形を形成することでも分かる。

当時の日本の領域を示す地図の基点は日本随一の山岳である富士山であり、次いで東西軸に位置する大山である。そして、三角測量の結果として見出されたのが高千穂峰であり、この三山で巨大な二等辺三角形を形成する。

そして、このコアの三角形に対して平行線及び直交線を描くと、細長い日本列島の南九州～佐渡島辺りまでを包含することができる。

これに一定間隔で補助線を入れると、「枝式地図」が出来上がる。これは、方角と距離を簡素に示す原初の地図の形態ではなかろうか。そして、使用の利便性を考えると、この「枝式地図」は長さ1m程度、縮尺1/100万程度であったと推察される。素材としては、まっすぐな竹等が有力であろう。

なお、本稿は、客観的事実（青銅器の埋納位置と山岳の位置関係、富士山・大山・高千穂峰の位置関係等）と主観的推測（測量方法、地図の形態等）からなる。後者については可能性の論述なので、別案があればお聞かせ願いたい。

参考文献・資料

- 1) 土木学会、『明治以前土木史』, 岩波書店, p.1464, 1936.
- 2) 木村俊晃, 古代地域計画の原理 第1部, 土木研究史論文集第2巻, 土木学会, pp.83-97, 1982.
- 3) 木村俊晃, 古代地域計画の原理その3 幾何図形論—金印の島のピラミッド図形—, 第4回日本土木史研究発表会論文集, 土木学会, pp.137-139, 1984.
- 4) 須股孝信, 畿内の遺構配置に見る古代の土木技術(その1)—都市計画基本線の存在—, 土木史研究, 土木学会, pp.307-318, 1990.
- 5) 岸俊男, 古道の歴史, 古代の日本5近畿, 角川書店, pp.105-106, 1970.
- 6) 小川光三, 大和の原像 古代祭祀と崇神王朝, 大和書房, pp.64-68, 1973.
- 7) 大谷幸市, 古代史を解く三角形, 中日出版社, p120, p134, p157, 1982.
- 8) 堀田総一郎, 神々のメッセージ, 中央アート出版社, p18, pp.22-23, p63-64, 1995.
- 9) 伊弉諾神宮, 伊弉諾神宮を中心とした太陽の運行図, 2000.
- 10) 本名孝至, 淡路島と國生み傳承雜考, 神道文化 18号抜刷, 「神道文化」編集委員会編, pp.4, 2006.
- 11) 池田潤, 古事記のコード, 戎光祥出版, p16-46, pp.174-183, 2011.